

『優しい認知症ケア ユマニチュード』

「施設職員が学ぶ技術」としか捉えていなかったけれど

津田新菜

これまでユマニチュードを学ぶ機会があり、多少の知識は持っていた。病院や介護施設等の職員が行う認知症ケアの一技術との思いがあった。認知症の方と暮らすご家族とユマニチュードの思想と技術を分かち合い、日々の生活の中で実践できるということに驚いた。

たしかにユマニチュードはコミュニケーション技術の一つである。その技術を身につけ、お互いの日々の生活しにくさの解決に役立てるということは特別なことではない。にもかかわらず、「施設職員が学ぶとよい技術」という観念でしか捉えていなかった。日々対応に苦慮している家族に教えるという発想はなく、家庭での実践こそが必要なのだということに気づかされた。

認知症の方と暮らすご家族から、対応についての相談を受けたことがある。その時ご家族が「結局、神対応しかないってことですね」と捨てセリフのように言われたことが心に引っ掛かっていた。

“認知症”という言葉は、今では知らない人はいない言葉になりつつある。しかし、認知症に対する知識や理解はというと、“悲惨で介護が大変な困った病”が多いのではないだろうか。超高齢社会を迎え「誰もが認知症になりうる」と言われてはいるが、認知症になったことは本人のみならず家族も受け入れがたい“特別な病”のように思う。

『認知症の人たちは私たちが思っているよりはるかに自分のことや周囲の状況をわかって苦しんでいる。中核症状による不自由が大きくなる中で、情けなさ、ふがいなさとともに自己効力感を低下させ、つらさを募らせている。

身近な周囲の人たちは“しっかりして”と励ましや願望の“指摘”をする。眉間にしわを寄せて励ます。認知症の人はそれを早い段階から“叱られる”と受け止めるが、周囲の人たちに叱った意識はない。

認知症の人は不安やつらさを募らせ、周囲とのつながりをなくし、叱られ続けることで尊厳を失い、BPSDが発現する。BPSDが生じると周囲の人たちは驚き、叱責は強まり、更にBPSDを悪化させる悪循環に陥る。』。そう述べている資料を読んだことがある。

良かれと思って行っている日常の関わりが、症状を悪化させる原因になっていたとは誰もが思っていないだろう。

ユマニチュードはこのような悪循環から「見る」「話す」「触れる」といった人間関係を再構築し、人間らしさを取り戻す術なのだと思う。VTRの中で認知症の方の夫がユマニチュードの関わり方を「技術なんですね」と言っていたのが印象的であった。

この講座で何度か取り上げられている精神科病院における閉鎖空間、鍵で管理される支配と被支配関係。

鉄格子が取り払われ、カーテンがかけられプライベートな空間を確保することができるようになってきてはいる。けれど、周囲から不安と絶望を与えられ、混乱させられ、病的世界を肥大させられ、孤独の淵に追いやる関わりがなされているのを感じる。

それは、認知症の人に対し無意識に行われている“指摘”や“叱責”に通じるものなのだろうか。自立支援といいつつ、何がその人にとっての自立なのか双方向のコミュニケーションなしに、支援者側のものさしでの関わりになっているようにも思える。

人は人との関係で“人間らしさ”を取り戻すとあった。人との関わりは、人間らしさを奪うことも取り戻すこともできるのだ。

いつまでもその人らしく生活できる人間関係構築の技術について考え、取り組んでいきたい。